

「一万タラントンの憐み」 (2023. 2. 19)

「その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。」(マタイ18:27)

大学4年の夏休み、50ccの zippy というバイクで、本州・四国・九州を一人で旅した。「知らない街を歩いてみたい どこか遠くへ行きたい…」という歌に誘われて、今思えば無謀ともいえる旅だったが、心に刻まれたことの一つに「旅は心を素直にする」がある。



四国のある国道を走っていた時、バイクの調子が悪くなり、炎天下、道路わきで修理していた。すると、「こちらに来てやったら？」という声が聞こえた。振り向くと、ある呉服屋のおばさんが手招きしている。人との触れ合いがふと恋しくてそのお店の玄関前に移動し、修理に取り掛かった。すると、そこに私と同世代の娘さんもいて、水やお菓子を戴きながら、いろんな話をした。修理も終わり出発しようとしたら、おばさんが「これもって行ってあとで食べなさい」といって、何か包みをくれた。お礼を言って別れ、しばらく走って道路沿いの小高い丘で、その包みを広げた。キノコやタケノコなどの入ったまぜご飯だった。あと二度と会うこともないであろう風来坊の私にここまでしてくれるのか。そう思った時、滂沱の涙が溢れてきた。これまで多くの善意に支えられてきたが、後にも先にもこの時ほど感動したことはない。旅の素晴らしさの一つである。

イエス様は、仲間を赦さない家来のたとえを話された。1 万タラントンの借金のある家来を、彼の主君は赦し、帳消しにしてやった。ところが、この家来は百デナリオンの借金をしている仲間を赦せなかった。これを聞いた主君は、「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」と言って、彼を牢役人に引き渡したのである。

一万タラントンという現代の日本では、6000 億円に相当する。百デナリオンは 100 万円である。思うにこの家来、自分が受けた憐れみの凄さを感じ取っていない。6000 億円の憐みを受けたのに 100 万円の憐みにも思っていないのだ。ふと、自分を振り返る時、この家来は自分のことだと気づかされた。イエス様が十字架上で全き犠牲となられた故に、私は罪・過ちを完全に赦されている。聖餐を通してイエス様と結ばれ、永遠の命の希望に生きている。6000 億円以上の憐みである。でも、どうだろう。どれほどの憐みに受けた者として生きているだろうか。

旅は心を素直にする。信仰の旅の目的地は、一万タラントンの憐れみ、その凄さを素直に感じ取れるようになることかもしれない。